研究通信

NO. 47

1964　4刊
村落社会研究会
事　[illegible]　局
東京都港区芝三田2ノ2
慶応義塾大学
第三研究室内

研究通信前号において会員諸氏の研究テーマをお知らせいたし、本年度大会運営について御相談いたしましたが、御返事はきわめて少なく、はなはだ残念でした。

四月十七日、慶応義塾大学において、拡大委員会を開くため案内状を東京・近県の四十三名にお出しいたしましたが、出席者は田野崎昭夫、柿崎京一の両氏と事務局の有賀、小池、他三名のみであり、大会の運営を決定するには、いささか少数であったのは遺憾でした。その際の議案について改めて会員諸氏に御相談いたしたく存じます。

① 大会日程　九月二十三日（秋分の日）、二十四日（木）

（なお、社会学会は九月二十六・七日――都立大学です。）

② 大会開催地　神奈川県逗子市新宿「松汀園」（国家公務員宿舎）――交渉中

③ 課　題

A、共通課題方式のみ

B、自由課題方式のみ

C、両者を並列して取り上げる。

共通課題として提出されたものは次のものでありますが、その他に適当な課題をお考えの方は御提出して

〔三四〇〕

47

いただきたいと存じます。

① 「むら」の解体

② 農民移動の時代的変遷

③ 農業の体質改善と農村変貌の地域差

④ 村落の社会的機能・役割の時代的変遷

なお、右記のいずれかに御賛成の方は、その旨必ず折返しお知らせ下さい。五月十五日（金）に大会に関する一切の決定をするため、拡大委員会を慶応義塾大学第二研究室内野ロルームにおいて開催しますので、遅くとも五月十四日までに御返信ください。

課題①の提案者から次の説明がありましたのでお知らせいたします。

「むら」という概念自体、村民の意識によっていろいろに理解される概念であろう。そのような概念規定の変化を生ぜしめる種々なる要因を、いろいろな地域（日本以外の国々を含む）において、歴史的、段階的に追求することによって、「むら」がどのように解体し、また再編成されていくか（解体、再編成の形態）をとりあげる。それは当然に村落の構造（経済的、社会的、政治的）の変化にかかわりをもつので、農業構造改善事業、地域開発等が農村社会にどのような影響をおよぼすかといった問題、あるいはまた農村の「近代化」――それへの農民の対応形態といった問題もこの角度から取り上げられる。

（三四一）